

「おい婆さん!」

十間許りに近づいた婆さんは驚いて立停つた、品の好い七十格好の切り髪姿や手に珠数を有つて御座る。苔野が走り寄つて一言三言問答をする、婆さんは後を指して一々丁寧に教へて居る、親切相な、孫たちから引張りだこにされさうなお婆ぢや。

「叔父様すつかり分りました、彼の杉が良辨杉だつてますよ、良辨僧正が子供の時に鷲に攫はれて来た杉なんで、其の上の寺が有名なる二月堂ですとさ可笑しいのは彼の婆さん、ニングワツダウ〜つてましたがネ、二月堂がニングワツダウなら三月堂は……此奴ア駄目だ……やつぱりサングワツダウだつた、四月堂……は……旨い、シングワツダウだ、ゴングワツダウに、ロクン

グワツダウ、七月堂に八月堂……。」

(卅四) 肉身の観音

七寸の尊像は懷爐に好かる

鐘は鳴らねば寂しいものぢや

謡曲と歌との優劣 貯蓄主義

「私共は貴方がたよイマツと遠か處ン者で御座ンす。立派なお子息さんで……わら、甥御さんでナ貴方、左様で御座ンすか、私ンたア此ア貴方、弟坊娘で御座ンす、病身で御座ンして、長う病うで居イましたとが貴方、此のお観音様アお願掛ツと可かと聞きましたけン、二百里も懸隔イお願掛けました處

が、此様達者なイまして御座んす。お願はほどきイ親娘連エ参詣致しました
 お丈ア唯七寸しきアお有ンされンばツてん肉身の十一面觀世音さんテ、生き
 て御出ンさるケン貴方、何時でン温うくして御出ンさアて聞まして御座ん
 す。有難ア事で御座んすナ貴方……そイからナ貴方……。」
 此れは容易ならん、俺の言葉も解らぬといふけれども此の御内儀の話も滅多に
 解ることでは無い、せめて節だけ附けずに言うて呉るれば今少しは解りも爲や
 うに、神武天皇様の歌と同じ事ぢや、これもヤツぱり古いのぢやらう。それは
 さうと此處の觀音様は身の長七寸で、肉身で、温うくして生きて御座るとは
 又妙な佛様も有つたものぢや。何時も温ければ懷爐に好かる……と一寸思ひつ
 いたが、勿體ないから口には出さぬ、罰の當らぬうちに取消にして置かう。

此處も好い眺望を有つて居る。直ぐ下に見える建物、足場の掛つて居るのが大
 佛殿ぢやげな、ずつと向ふに田圃が有つて處々に森が有つて、ずんとの向ふが
 屏風の様な山つゞきぢや。此の様に山が多うては難儀ぢやる、はゝわ、ヤマと
 いふのは邪魔といふ言なのぢやなさうぢや〜。
 二月堂の北に登廊と云うて、屋根附の礎道が有る、大分急で長い、母娘の衆は
 眼が眩ふからと、降るのを止めて南の方に行つて了うた。苔野は喜んでピンピ
 ン飛んで降る、私も昔は鎮守の石段で盲鬼子を行つた子供ぢや、年こそ老つた
 れ、なんの〜此れ式の段々道に恐れることでは無い、とつと降りて、平地
 に出た。開山堂、三昧堂を見て、又坂を降つて鐘堂に行きついた。これも大き
 な鐘ぢや直徑一間半もわらう、厚さも指股一尺で足らぬから八九寸はある。鐘

は大きいが鳴らさねば寂しいものぢや、寂しいけれども此邊は豁としてかう心持が好い。煙草を吸つて少時休息をして鐘樓の下の砂の上に革靴を腰掛に坐つて居る。

西から若い坊さんが一人来た、東から来るのは老人——珍らしい老人でチヨン鬘を結うた人ぢや、苔野がいふ通り奈良は舊い處で古い人も居るものぢや、と感心して見て居るうちに、兩方から、おゝ、あゝと驚いて足を停めて立話を始めた。

「先生、貴翁は此の頃お諸は如何で。」と坊さんがいふと、老人は「いやもうあれは本のなぐさみで。」といふ。「御子息が中々御上達の由承りましたか。」と言へば「あの様なことは精出して無益なもので、いくら稽古したとて、商

賣にして居るものには敵ふものでない。」

問は老人の番に爲つた「近來貴僧は御詩作は如何で。」「一向不勉強で何も出来ません、金波樓の主人は實に達者なものです。」「詩作は別才で、強ち學問に依りません、貴僧御歌の方は如何。」「時々詠んでは居ますが、俗事に追はれがちで、貴翁は相變らず御秀逸が多う御座います。」「いや、併し謠よりは、歌の方はな、死んでも子孫に傳へることが出来ませう……。」

若い坊さんと年老つた翁さんと、孰も閑なお方と見えて、立話がまたなかなか盡さない。翁さんの言葉が俺が氣に入つた。貯蓄主義から勘定して謠よりも歌が勝に定めたのは至極御尤もぢや。

(卅五) 大 佛

大佛殿は修繕の最中

卅二相―百福で一相

厚い唇―長い鼻の下

大佛殿は今修繕の最中、境内は材木が散亂して、纜に通じ路だけ開いて居る。石段を上つてやうく大佛殿の中に入りは入つたものゝ、ほんの闕を跨いだいけで、奥に進むことは爲らぬ。そこもこゝも繩を張り廻して作事係の外は一切通行禁制と相成つて居る。見物も何も出来るものでは無い、これで當り前に木戸錢を取るの不埒ぢや、割引をするか半札を出すか當り前ぢや。

張り繩のたるんだ處を氣が附かずに一寸越えたら、大きな聲で誰か尤めた、堂の前に交番所の様な小屋が有つて、其の小屋の中に瘦男が眼張つて居たのぢや、柄に無い聲が立つ男ぢや、餘ッ程尤め慣れたものぢやらう。まわ仕方が無いから、恭盤乗りをした氣で、繩張り内に立ちすくんで御堂の中を見廻す、二三十間も高い堂ぢやから、柱は皆五本も十本も織いである、縦横に入れ亂れた足場の奥に薄暗く、大佛様のお顔が少々ばかり拜まれる、少々と言つても、莫大もないものぢや、口の長さが三尺七寸、鼻下が八寸五分といふのぢやから、幾何人間が大きな顔をするぢやの鼻の下が長いぢやのと言はれる奴でも、なか／＼以て及ぶ所では無い。

『のッ苦野、斯う大佛様の前に出ると人間のつまらん事が解る様ぢやのウ。』

「え、馬鹿げて大きなもんですね、今の世の中に出來ることでは有りませぬ、銅像が流行ると言つた處で大佛の掌に載つかる様なばかりでは明治の、むしろ恥辱です。多分此れは奈良朝當時のハイカラ黨が、何か一つ支那の奴等を驚かしてやらうといふ負け惜しみか示威運動かなんですよ。何にしろ思ひ切つた大きなものです、男ッ振も鎌倉のに敵ひませんが、東京や京都のより優でさ。最初の大佛は屹度好かつたに違ひありませんが、幾度も首のすげ換をやつたんでとうとう此ンなに爲つちやつたんでせう。」

「大佛さんのすげ換が有るか。」

「有りますとも、此の案内記にも書いて有ります、地震で墮ち、火事で墮ちた外に獨自に鬱つて了つた事も有ります、意氣地の無いのは勘辨してやるとし

て、勘辨の出來ないのは不恰好です。」

「また貴様は佛様に標致好みをするのウ佛様は三十二相、相好圓滿と言つて此の上も無い好い男振りぢや。」

「だつてあの唇の厚いのなんざア、怎麼したつて日本には向きませぬネ。」

「其れは不向ぢやらうよ、人間が輕薄に爲つて段々に唇も薄うなつて來たのぢや取り別けお前などの様にベチャクチャと饒舌するには佛様の様な厚いのは、迎も動きこなすことではあるまい。卅二相といふと太したものでぢやげな百福を修してやつと一相が手に入る都合ぢやから、三十二相を具足するにはべて三千二百福を修せねばならぬ勘定ぢや。其の一福といふのすら容易の事でない、百億三千大千世界の人間が一時に殺されるのを助ける程の大善根大

功德が、一福の數取に爲るといふぢやから、佛様の眉毛鼻鬚一本たりとも大抵の事では無いぞ。』

『好い鹽梅に私なんか大善根を施さなかつたもんですネ、印度流やホツテントチャ式の唇など具足させられちや堪まらないや。』

(卅六) 猿澤池

東大寺から興福寺——址ばかり

礎の上の董角力、活きた噴水塔

采女身投げの原因——ヒステリー

東大寺から興福寺に出た、何の址彼の址と、さても址ばかり多い處ぢや、でも

生じかな偽物を作つてあるよりは、址は址のまゝで放つて置いてゐる方が面白い。廣い芝原の中に大きな礎が残つて居るのは、如何なに大きな柱が立つて居たらうか、其の柱の上に如何な大きな桁があり梁が横たはつて、どんな大きな棟が聳え、どんな大きな鬼瓦が有つて、どんな大きな鴟が、どんな大きな聲で鳴いて居たらうかと想はれて限りもなう床しいものぢや。

其の床しい礎に今しも數人の子供が上つて居る、手にく小さい董の花を持つて居て、花の頸を引つけかけ合つて董角力をやつて居る。一人の男の子が突然起つて、前をまくつてしやア〜とやらかす、さながら活きた噴水塔ぢや。

興福寺の五重の塔は立派、其の側に華の松といふのが有る、高さが十四五間、東西南北に擴がつて一段二三畝もあらう、是れも立派ぢや。南圓堂は圓かり相

な名ぢやが、八角ぢや。

一番愚かなものは博物館ぢや、恥かしげもなう、ようもあの様な不様なものを建てたものぢや。師範学校の庭に八重櫻がある、東圓堂の址ぢやげな、東圓堂は圓かつたか、何角ぢやつたか、址ばつかりで解らん却て面白。

猿澤の池は三段許りの淵さ、如何なる早魃にも涸れたことが無いといふ。

『叔父様好い池ですネ。』

『うん、此の位の水の潤澤な溜池があれば田地の三十町は雨乞の心配も無いのッ。』

『吾妹子が寝たれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しと……とネ、有名な池でッ。』

『何で有名ぢや。』

『今申しましたのは柿本人麿の歌です、此の池に采女が身投げしたのを、時の天皇様が可愛相だつて、わざと御行幸に爲つて歌をお詠みになつたのです。柿本人麿も其の頃の人ですから、募集に應じて詠んだんでせう。あの柳が身投げ采女の衣物を掛けたので衣掛柳といふんですとさ。』

『身投げするに衣物を脱いだのは妙では無いか、素裸で飛び込んだのか。』

『さうですネ、氣が注ぎませんでしたネ、禪一つでは變ですネ、今なら海水浴の様ですネ。』

『采女らふのは一體男か女か。』

『常談仰しやい、うねめといふから、女に極つてるぢやありませんか。』

『でも采女の助といふのも芝居に有る、あれア男ぢやぞ。』
 『采女は女ですよ、美人投票の様に各地方から選抜して宮中に進獻したチャンピオンですよ。』

『なせまた其の女が身を投げたのぢや。』
 『御寵愛が衰へたのを歎いて自殺の決心をしたんだッてますが、例のヒステリ―でせう、女ッてものは自尊の強い者ですから、男が自分に奴隷的愛を捧げなければならぬ者の如く考へて居るんです、其の自尊が傷けられると、ふて、妬く、泣く、泣く、わめく、引つ抓く、食ひつく、或は食を絶つ、夜寝ぬ、遂に神経衰弱に陥つて、首を縊る、井戸に飛込む……昔から通相場なんですよ。』

(卅七) 西洋料理

鹿の奈良―名残惜しい

吸ひ悪い豆汁―食悪い牛の油揚

煙が真黒―はら大阪が見える

奈良は好い處、何もかも氣に入つた中で一番好かつたのは鹿ぢや。春日神社より下つて停車場に至る奈良第一等の通りに、主立つた店は土産店で、其の店を飾つて居る主立つた品物は鹿の細工物ぢや。奈良から春日神社の大通を除けたら殆ど町は無い、春日神社を除けたら―春日神社から鹿を除けたら、どんなものぢやろ。鹿の春日の―春日の奈良の―取りも直さず、鹿の奈良ぢや。

名残惜しいがおさらばぢや。

汽車の窓にちらりほらり到る處に塔が見える、森の梢に塔の見るのは誠に床しいものぢや、塔の無い寺は、女にしたら簪を挿さぬやうなものぢや、らうかい。
「叔父様食堂に行きませう。」

『何處ぢや。』

『先刻シルクハットの人が、ほら酒を呑んでた車が有りませう、われでさ。』

『う、彼の胴切の黒帽子を冠つた人の居た處か、俺等が這入つても好いかのウ。』

『食堂ですもの、錢さへ拂へば誰だつて關ひません、どうせ辨當を買ふんでせう。』

物は試しとツヒ好奇が出て、苔野がいふなり這入つたが、汽車の中に料理屋とは便利な工夫もあつたものぢや。始めて西洋料理といふ物を喫うたが、豆の入つた汁を大皿に入れてある、西洋に碗といふ便利な物は無いのか知らん、匙で飲むのは餘程不勝手なものぢや、汁が少くなるとどうしても掬はれぬ、皿をかへて吸はうとしたら苔野が睥めた、残して置くものぢやらうかと苔野が皿を見れば一水も残つて居らぬ。次に牛肉の油揚げが出た、一々庖刀で切つて食ふとは愈々以て便利が悪い、酒の上の悪い同志なら此の庖刀や錐で大怪我を始めるに違ひない。香の物も出ずに後口の悪いことぢやが、萬更不味いことも無い、これなら俺も隠居をしたら世界一周會に加入して洋行をしても食物に不自由はあつた。

トンネルを二ツ三ツ潜つて了へば、國の名の大和は河内に變る、地勢も變つて氣候も變つて桃が咲いて菜の花が咲いて、麥も豌豆もずんと伸びて居る。彼岸過ぎの野良仕事にお百姓が神纏を着て居るのは、ちと優長に見える、金持の御隠居が慰みに島いぢりをやつて御座る様ぢや。俺等地方よりは地面が乏なうて、年に二度も三度も作が出来のぢやから、土地が餘計尊いと見えて隙間なく耕作が行き届いて居る、區劃が狭少で錦の切れの綴合せの様ぢや、島の區劃ばかりでない、國の區劃も細かうて、たツた二つか、目と鼻の間に停車場を通つたかと思ふうち、攝津の國と爲つて來た。村と町と町と村と大方絶え間なく續いて、犬どころか猫の聲も聞え合はう、事に依つたら噓の音でも隣村に響きさうぢや。さても上方は人間の多い處ぢや哩。

『叔父様、ほら見え始めました。』

『何がや。』

『大阪がですよ、御覽なさい。そんなに頭を出しちや、帽子が飛びますよ。』

『何處ぢや、早く見せい、どつちの山ぢや大阪は。』

『あの煙が然でせう、ほら彼の森が右に退くと、煙筒が見えませう。』

『あすこか、大阪は、夥しい煙ぢやの、出船千艘入船千艘といふが、其二千艘の帆柱も見えさうなものぢやの。』

『其れア貴方方向が違ひますもの。』

『早う着きたいものぢや、何と緩い汽車では無いか。』

(卅八) 煙 突

大阪は暗い——人間は白い
俵は狭い——橋が多い

『暗い、雨戸を開けい。』

『叔父様、雨戸は開いてますよ、雨戸を開けても閉めても同じでさ、御覽なさい隣の家が障子の外一尺に懸立ッてるんですもの法子が有りませぬ、窓は光線を探る爲のものと思つて居ましたが、大阪に来ては従來の窓の定義は變更せねばなりませぬ。』

『ぐどく言はいで明うする工面を爲んか、何にしろ斯う暗うては半屋に入つ

た様ぢや。あゝ氣がくさくさする哩。』

『だつて法子が有りませぬ、椽側はあの通り開いてませう。此の上は屋根の上に登るより方法はありませぬ。』

『何故に斯う暗いのぢや大阪は。椽側に坐らう、座蒲團は俺が持つて行く、貴様は火鉢をかへて來い。いや、可かん、酷い埃ぢや、黒埃ぢや、やあくばらくと降り込んで來る、怪態な天氣ぢや、早う雨戸も障子も閉めて了へ。』

『叔父様、此ア煤煙です、煙突の煙が吹き込むんです、風向が悪いです、いや彼方にも此方にも煙突が有る、風が變つたつて駄目です、いづれ何の煙突かは風上に爲りませ、驚いたなあ、空は煙が捲き立てゝ居る、大阪が暖かい

と思つたら此故だ。』

『石炭の煙ぢやのウ、其れにしては人間の色が白いのは不思議ぢやないか、此れ丈の煙を晝夜に吸ひ込んで、ようまわ肉に浸み込まぬものぢや。俺は呼吸が切ない、嫌な煙では無いか。』

『けれどもネ、倫敦なんかは滅多に目を見ることも無いと言ひますよ、煤煙の多いのは工業の隆盛なので、此アつまり大阪の寶煙といふ可きです。』

早く朝茶でも飲んで咽喉の煤を流さねば氣持が悪うてどうもならぬ。手を拍けば婢が來た、而も二人來た、氣が利いたものぢや、俺が茶が欲しいと察したのか、それとも孰の泊り客も起きたら直に煤流しを急ぐのに慣れて居るのか、ちやアんと鐵瓶急須茶碗取揃へて來たのぢや。茶うけに小粒の梅を持つて來た

迎もの事に味噌でも給るれば好い、煙管の掃除は味噌汁に限る、石炭の煙にも屹度効能が有らうと存ずる。朝飯を食て、さて此れから見物に出掛けるぢや、案内兼帶の車をはずんで貰うた、長い股引を穿いた中老の車夫が來た。

苔野を後に、俺が前の車に乗つたは好いが、何とやら腰の落ちつきが悪い車ぢや、梶棒が低いのぢやろと思つて、上げさせて見たが、矢張工合が悪い、又下げさせて見た、背の蒲團が邪魔なのかとも思はれる、坐り直して見たが其れでも可かん、體をモグ／＼させて居ると、車夫は『どないにしまんね』といふ其れが判る位なら心配はせぬのぢや。どうでも大阪の車は入りが淺うて幅が狭いのぢや、其れで體が飛出しさうに險呑なのぢやらう。それならば緊かり兩方の縁に捉まつて居れば好かる。

『よし〜、さア突走れ。』

『何處へだす。』

『何處へ出して好いぢやか、苦野、其の一番繁昌な處から先に見て了はうかのう。』

『い、でせう、車夫心齋橋通へ行け。』

車夫は心得て走り出す、狭い路を遠慮なく走る、危ないこと〜、幾度か人を轢きかけやうとする、不思議に巧く先方から避けて呉れるので好いが、乗つて居る者の心配といふ者は一通りで無い、車夫は一切管はず、何でもかでも轢き捨御免で、もゐる様、勢ひ込んで尙走る、橋を渡つて又橋を渡つて……。』

(卅九) 心 齋 橋

心齋橋と捕鼠器
町が狭くて結構
兩側一緒に見物

うん、此橋ぢや心齋橋は。若い時分に上方土産に貰つた小さな覗き眼鏡に、卅何枚といふ名所の寫真が有つた、其の中で心齋橋が一番珍らしい形——虎挟みといふ鐵製の捕鼠器に似た様なものぢやと思つた事がある。其の頃は俺も若かつた、あの覗き眼鏡を餘り珍重がつて近所の娘共を寄せ集めたで、親爺様に叱られたこともあつた……思へば古い、もう彼は二昔、三昔にも近いことぢ

や。

寫眞で見て嘸大きな橋ぢやらうと思つて居たに、来て見れば名高い割にも無い併し大きいので名高かつた譯では有るまいから俺が勝手に大きいものに極めて居た其の思はくが違つたとて不平を鳴らすといふ筋合は相立たぬ。其れはさうと此の筋の繁昌は怎麼ぢや、驚いたといふのは残念ながら全く以て驚いた、まアピカ〜〜と店といふ店は光輝いて居る、仰山な通行人ぢや車が危なうてならぬ。

『オウイ苔野、車を降りて歩かうでは無いか。』

『えい。そんなら車を返しませうか。』

『返したら歸り路が解るまい、宿の町名番地はチャンと控へて居るが……。』

『なアに何處にだつて車は居ますよ。さあ歩きませう。どうです、此が大坂第一等の場所ですか、常陸山が二人駢んだら往來止めです、何といふ狭い町でせう、それに家が低くつて何だか押し附けられる様な氣がしますね。』

『さうで無いぞ、俺は却て、東京で、御所の前の三菱町のあの四階五階の煉瓦屋の間を通る時嫌な事ぢやと思つた。』

『あれ丈立派な建築の揃つた處は有りやしません洋行した様な氣になつて愉快ぢやありませんか。』

『ン、お前の下宿の小娘も其の様な言をいうたが、俺は嫌ひぢや。考へても見い、萬一地震が有つたら怎麼する、家の内に居る者の危なさは勿論の事、往來を通つて居るものもあの高い煉瓦や石に落ち被られたら骨も碎けて糊に爲

るわ。あゝ思つても身の毛が立つ。其故ぢやからわの様な高い危ない街は萬一の逃げ場所に路を廣うして置かんとならぬ、併し路を廣うすれば風が強うて塵が立つ。それより此處の様に小ちんまりとした方が却て好い、何より便利は斯う歩きながら兩側とも一度に見物が出来るぢやないか。』

(四十) 店 頭

柔術で固めた小男、力士の肚腹

大阪人の眼が飛出して居る因縁

苦野が買物が有るといふので、とある西洋小間物店に入つた、問口の三間にも足るまい、狭い店ぢや、が其狭い家を寸分の隙間なく巧く品物を飾り立て、あ

る。譬へば柔術で固めた小男の様ぢや。東京の店はどうかすると、たゞ潤うて縮りが無い、相撲取りの肚腹でだぶついて居る。店に、番頭といふか手代といふか知らんが、若い男が三人居る、其の奥に主人でわらう元頭が低い格子の垣の内に顔張つて御座る、面白い工夫に元げた頭ぢや、元るならつると元げて了うたら好かるに、額の處に禿残つて居る十本許りを一本づゝ後に引延べてある、断念の悪い頭顱に見える。面はてかくと好う光つて居る、机に肘をつきながら頬と顎を撫で下して居るが、其の割に顎は光らないで鼻の尖が光る。主人も番頭も手代も揃て不思議に目が飛び出して居る一毛の利潤も見脱がすまいと先祖代々むき出して來たから自然と斯も爲つたのぢやらう。眼頭が大きうて眼尻が細つて居るのは不思議ぢや、此にも何か所縁

が有るぢやらうが其處までは考が及ばぬ。

商賣の本山ともいふべき大阪、其の大阪第一等といふ心齋橋筋の商賣人にしては不愛嬌なものぢや、俺を田舎漢と見ての横柄かも知れぬ、若野は一寸東京辯も使ふけれども是れとて書生洋脈を着て居るから、上等客には扱はれぬ筈ぢやいや〜大阪は商賣人の勢ひの強い處ぢやから自然買手よりも賣手の方が權式が高いのぢやろ。

若野は、罷せば好いのに幾本も〜杖を出させて見て居る、何でも無い竹や木の杖に一寸した銀金具の打たのを五圓の八圓のと言つて居る、馬鹿らしい事ぢや其儀な高いものを買はせる事では無い、流行ぢやから若い者の杖なぶりも一概に尤めはせぬ、俺等若い時は喧嘩の要心に十手を携つてゐるいたものぢや。

元々要心の爲の道具ぢや、おんな繊弱い杖が何の役に立たう、杖は檜の木に限るものぢや、槍でも薙刀でも皆外の木は用ひぬものぢや、堅うて粘りのあるのは枇杷が最上ぢや、併し長い直な材が取れぬ精々木劍が出来る位ぢや。

『八圓なんて馬鹿々々しい、三圓に負けたまへ。ねエ叔父様。』

『三圓、何ぢやそれは、西洋の木、皮が着いて居るのは枝ぢやらう、何の木であらうと枝や若木はまさかの用に立つものぢや無い。』

『まさかの用なんて、犬殺しぢやあるまいし、ステッキは小さいのが好いんでさ、番頭君、三圓五十錢にしておきたまへ。』

『こら若野、誰が三圓五十錢出すのぢや、やア、番頭さん負けても駄目でござるぞ、三十五錢でも俺は嫌ぢや。家に弓の折れが有る、若野、歸つたら那箇

を送つてやるわ。』

(四十一) 四橋

小西來山涼しさの名句

四橋の一橋は架け換中

南に進めば又四橋を發見する

橋の側に石碑が有つて、字が刻つてある。若野は嬉しうに。

『涼しさに四橋を四つ渡りけり——と叔父様名吟ですネ。』

『何方の發句ぢや。』

『小西來山と言つて芭蕉より先輩なんです、四橋を四渡りけり……と巧いもん

でせう。』

『何故四橋ぢや。』

『御覽なさい、ほら川が十文字に爲つて居ませう、橋が四つあるでせう、だから四つ橋でさ。斯ういふ橋は外に無い名所なんです。』

『一イニウ三イ——あとの一ト橋は今此の架け換へ中のおやな。成程べて四橋に爲る。』

『さうです、だから四橋を四つ渡りけり……でせう、來山一生の傑作です。』

『そんなに巧い句に爲るのかのう。涼しさに四橋を四つ渡りけり——と、何處が佳いのおやらうか、はてな、俺も發句は二百も三百も作つたことが有るのおやが……。ン、解つた四橋ぢやから四つ渡つたといふ所が成程善う勘定が合

うて居るぢや、其處が巧い所ぢやのう。』

『そんな事が有るもんですか。』

『そんなら何處が巧いのぢやらう、涼しいから四橋を四つとも渡つたといふのか。』

『まあ然なんです、四橋を四つ渡りけりと吟じて御覽なさい、團扇でも手に持つて浴衣掛でぶらりと門を出て行くとしもなく浮か〜と風に吹かれて橋の上を逍遙うて居る光景が目前に浮ぶぢやありませんか。』

『浮ぶか、お前の目は不思議なものぢやぞ、此の發句を誦んだからちふて俺の目は何とも無いのぢやが。涼しさに四つとも渡るなら、熱かつたらどうぢや、三つ渡るか二つにするか、アーン。』

『そんな理窟言つたつて詩美が解るもんですか、駄目です罷ませう。叔父様何だつて其んなに字に指を突込んで弄りまはすんです。』

『いや、此はの、先頃村の征露紀念碑を立てるに就て、石工が字の刻り方を講釋したが怎麼も呑み込めんことが有つたから、念の爲此名高い石碑を調べて見たのぢや。さあ是で大阪唯一の四橋の見物は濟んだ、此から何處に行かう。』

道頓堀が近いといふ事で、其の方向に向つて四つ橋をまづ一橋だけ渡る、吉野屋橋と書いてある。左へ山つて下繫橋といふのをまだ一橋渡つた。南に真直に進めば殆ど一町毎に橋が有る。

『おい、吉野、又四橋が有るわ。地圖を出せ〜、ほら金屋橋に深里橋、浪芳

橋に大黒橋、合せて四橋に爲るぢやが、石碑は無いか捜して見い。』

(四十二) 道頓堀

何處にもない門並の芝居

苔野の文士劇は面白くない

西洋の幽霊はとんと駄目

『いかさま此は賑かなこと、嬉しい〜、芝居が門並みぢや、此んな處は東京にも無かつたぢやろ。』

『え、有りませんネ。』

『京都にも有るまい。』

『無かつた様でしたネ。大阪にはまだ此處の外にも劇場は有るさうですよ。』

『まだ有るか、益々エライものぢや、京都はお寺が名物ぢやツたが大阪の名物の方が賑かで好い、芝居は俺は好きぢや、まわ旗や幔を美しく往來に張り渡してゐるが、よう是れで警察が喧しう言はんものぢや。繪看板がどうぢや見事では無いか、苔野。』

『さうですネ、俗悪を極めたもんですネ、此れでなくちや此處では可けますま。いやに金びかに赤いもの盡しなんぞ堪りませんネ。』

『光るのが悪いか、なせ赤いものは悪いか。いつかお前達が行つたあの文士劇といふものもやはりびか〜して居つたぢやないか、あの芝居は何とか言うたの、片假名名前は記え悪うてどうもならん、何でも魚の名ぢやつたが

……
『ハムレットですか。』

『ウンそれ〜。それから断れ〜に幾幕もあつたがどれもちつとも面白うなかつたぞ、妙な幽霊が出た處があつたが西洋の幽霊はちつとも凄うないの、第一足が有つて歩行くのが可笑しい、昔から幽霊に足は無いものと極つて居るわ、それに又手つきが可かん。』

『そんなこと言つたつて仕様が有るもんですか、さあ行きませう。』

『芝居を見物して行かうぢやないか、今始まつて居る様ぢや。大阪に来て芝居を見物せんでは土産話にならぬ。』

『見なくたつて解つてゐるぢやありませんか、貴方東京で稗子と一緒に御覽爲

すつたんでせう。三階の立見でどんなに體面が悪るかつたつて、其の後稗子がかぼして居ましたよ、歌舞伎座は日本一でさ、おれを御覽になつたら此處等のを御覽に爲る必要は無いでせう、ねエ不經濟になりませう。』

『なに一兩も出したら二人見られん事は何からう、何十銭とか張り札が見えてるぢやないか。名物は見ておかねば……。』

『名物々々ツて貴方、嵐山で花も見ななかつたんでせう、名物に旨いもの無しと相場が定つてまじ、見ない方が花でせう、第一、大阪にはペストが流行るでせう、まだ有るに違ひありません、見物人の中にどんな病毒が無いとも限りません、肺ペストなんか呼吸器から傳染するんですから危険です、又劇場の中には掏摸が多いです、それからまた色々危険な事があります、ナンです

……それ……火事が危険です、一朝火を失して御覽なさい、何千の群集が一
時に先を争うて出口を求めめるのですから堪りません火に死せずとも踏殺され
て丁ひます、現に亞米利加の劇場で斯ういふ例がありました其れは少し以前
の事ですがネ叔父様……』
『馬鹿にするな、俺をまるで赤子扱ひにするのぢやな、何も芝居に限つて其の
様な危険な事が集るものか、貴様見たく無ければ俺一人でも關はん、斯うな
れば意地ぢや是非とも見る、一人でも見る哩、何に一人の方が錢が要らんで
結構ぢや、見たくなければ貴様先に歸つて居る。』

(四十三) 新聞記者

エライ人——帽子を冠らぬ人

けの叔父に當り

來客は誰——某新聞外交記者

『お歸りやす。』
『昔野は歸りましたぢやるか。』
『へエ、先刻お連さんと御一緒に……。』
『貴郎さんお一人で何處へ行きアはりました。』
『俺道頓堀に行つて芝居を一幕見物してそれから千日前と申す所で女劍舞を見
て來ましたぢや。』
『え、事しやりました、お天氣は佳エしえらい人だツしやろ。』
『左様、えらい人も居つたに違ひない、つまらん人も見えた。第一帽子を冠ら』

……それ……火事が危険です、一朝火を失して御覽なさい、何千の群集が一時に先を争うて出口を求めめるのですから堪りません火に死せずとも踏殺されて了ひます、現に亞米利加の劇場で斯ういふ例がありました其れは少し以前の事ですがネ叔父様……。』

『馬鹿にするな、俺をまるで赤子扱ひにするのぢやな、何も芝居に限つて其の様な危険な事が集るものか、貴様見たく無ければ俺一人でも關はん、斯うなれば意地ぢや是非とも見る、一人でも見る哩、何に一人の方が錢が要らんで結構ぢや、見たくなければ貴様先に歸つて居る。』

(四十三) 新聞記者

エライ人——帽子を冠らぬ人
來客は誰——某新聞外交記者

『お歸りやす。』

『昔野は歸りましたぢやるか。』

『へエ、先刻お連さんと御一緒に……。』

『貴郎さんお一人で何處へ行きアはりました。』

『俺道頓堀に行つて芝居を一幕見物してそれから千日前と申す所で女劍舞を見て來ましたぢや。』

『え、事しやりました、お天氣は佳エしえらい人だッしやる。』

『左様、えらい人も居つたに違ひない、つまり人も見えた。第一帽子を冠ら』

ぬ人が多うてのウ。』

『いえ違ひます、さうやおまへん、オホ、。』

笑ひながらに上草履を揃へる、廊下を通りながら昔野が連れて来た客の容子を訊くに、立派な洋服男ぢやさうな、誰か見當が附かん。考へながら座敷に近づけば、昔野の甲高い聲と入り亂れて落ついた濼い聲が聞える。

『お歸んなさい、大變お早いぢやありませんか、矢張芝居は面白くなかつたでせう。』

『其の話は跡でも好い、まづ……。』

『此の方は私の同窓——眼中無人と云つて一昨年の卒業生で、今、當地で新聞記者をして居られるんで……。』

『此れは——初めて御意を得まする手前は藪野椋十と申して昔野の叔父に當りまする者で。』

『叔父様お罷しなさい、眼中君は知つて居ますよ。』

昔野が例に依つて俺の話の腰を折つて了うた。眼中といふ人は丁寧に挨拶をして名刺を出された。關西朝夕新報記者眼中無人と中央に二行、左の端に小さい字で「號一層樓、別號ベチ生」とある。新聞記者といふ者は色々の名前が入るものぢやナ。油断は爲らん此の仁温順しい風をしては御座るが、怎麼ことを書かれるか知れん、これア要心をして居らねばならぬぞ。ピカリ——と俺の顔を見なざるが氣味が悪いことぢや、何も俺の顔が新聞の種に爲ることも無いぢやらうが。

『君はネ そんなに羨むンだけれども、爲つて見玉へ、新聞記者と言ふ者は餘り面白いものぢやないよ。それア中には随分樂な人もあるさ、僕等と來ちやみじめ者だよ。外交記者と言へば人聞きは一寸好いが……其れには可笑しい話があるんだ、或る紳士の處に令嬢が有つて當世流の女學女藝殘る所なく仕込まれて舞踏と佛蘭西は殊に得意だつたんで、型の如く未來の良人は軍人で無ければ外交官と極めて居た。處に恰も好く某新聞記者より申込があつて職務員と探索すると外交記者中の敏腕家だといふ。すはや未來の外務大臣と令嬢の希望に吻合した。早速話が纏つて新家庭が出来たが、暫く經つと大問題が持ち上つた、滿洲問題でも辰丸事件でも無いんだ。花嫁の大不平だ、大失望だ。』

『何だネ。生活問題だらう。』

『其んな事ぢやない、其の記者は資産は裕かなのだ、品行方正で人格は高し、文筆も達者で、立派な紳士だ。』

『そんなら不平を言ふのは贅澤ぢやないか、男振りが悪いのか。』

『いゝえ、聞きたまへ、やはり外交問題なんだ、外交記者だといふんで細君は外務、即ち國交に關する記者だと思つたんだらう然るに事實はさうでなく其の記者は工藝や機械類に精しいので其の方面に關して外勤をする——所謂外交記者なんだ、其れで細君は一時大失望をしたが、夫が立派な人だから今では無論何の不平があらう圓滿なる家庭を作つて居るがネ……』

(四十四) 川 魚

胃袋と頭、大阪の特性

電燈赫奕、河の鮮灘の酔

数日の馳走頬がふくれた

眼中先生の思召に随うて夕食の爲宿屋を罷出る、大阪に特有の料理を馳走するとの前觸に苔野が勇んで、俺も物好半分に同行を致す、あとの半分は勿論嫌、馳走といふものは滅多に受るべきものでない、旨いもの食うて油断すなと古人の金言、此の金言を煎じ出す迄には古人もよく／＼苦い目に逢つたらう。現に拙者が一家を持つて以來三十年の實歴に徴するも餘儀ない談合は大概御馳走と

前後して来るものぢや、胃袋に馳走が満つれば、なか／＼頭は振られぬものぢや。

川側の町を行くこと數町、眼中先生歩を停めて此處ですといふ、苔野はケチな家だねと評する、戸口に入る直に石段がある、穴藏に座敷でもあるか胡亂な家どと考へる間もなく、石段は盡きて大河、大河の岸に舟を繋いである、板橋つづさに其の舟に入る、赫奕たる電燈の下に、衝立で仕切つた細長い七八間の舟座敷、是は妙ぢや。苔野も珍らしいかしてキヨロ／＼と其處等見まはして居る窓の外は漫々たる水、對岸の灯が映つて美しい。

「好いネ、眼中君、此處に斯うして坐つて始めて大阪の特性を看ることが能るネ。」

と苔野が感心の聲、おながち御馳走の前禮でもわるまい。

『道路が狭くて建築が矮小で市街は零だがネ、水は全く好いネ、併し水は夏だネ、絲竹を載せた涼み舟の舷々相摩して往來する時だ、確に誇るべき大阪と爲る。』

『何を食はせるんだネ、此處は。』

『今に来るから待つて居たまへ、下物は河の鮮、酒は即ち灘の醇なるものだ。』
 眼中先生得たり顔にいふ、追々に馳走が運び出されて三人の中なる小机の上に排べられる、先づくと辭讓の上に年嵩の拙者が一杯飲む、成程好い、何の癖も無いすつきりとした酒ぢやが、田舎口の慣れといふのは恥かしいもので、實は今少し甘口の方が望ましい。

下物は川魚ぢや、鯉や鮒や皆吾家の用水堀に在る魚で別段珍らしく無いが、不思議に鹽梅が好い、京都の様に砂糖漬の料理と違つて田舎口にも好う適うて結構ぢや、總じて大阪の食ひ物は旨い、此地に来てから不味いものは一品も食つたことが無い、僅か數日の逗留で此の削けた頬の肉も多少ふくれて來た様に思ふ。然るに昔から旨い物の比へ言に頬が落ちるといふのは怎麼いふ譯か。

『お、珍しい眼中さん』と、優し聲を出して年増の女が側に坐つた。眼中先生も地體の漉い聲を藏つて、何處から出るか浮々とした調子に爲る。

『此の頃は社の方が忙しいンでね。』

『逆ひまツしやる。』

『本當に忙しいんだ、社が……』

『しやはしやでも、しやが違ひまッしやる。』
要領を得ぬ押問答を二三回繰返した末にでもまあ怎麼した風の吹きまはしで來
さつしやつたかと、いふ様な意味の言を女がいふ、如何に翻々たる才子とは申
せ、まさか風に吹き飛ばされても來まい。

(四十五) 色 情 狂

天満天神、演説使ひ

中之島公園、花崗石造り

裁判所、不思議な法律

大阪天満の真中で……といふ歌が有る、彼は抑も此の橋の上で起つた事件であ

るか否か、疑はしいが若野には勿論誰にも尋ねて見る譯に行かぬ。
橋は見事な鐵橋、橋の中途に島が有つて上流が備前島といふ、備前島の上流は
網島、網島といふ名は淨瑠璃で聞いたこともある様なれど今思ひ出せぬ。天王
寺と關係が有つたか知れぬ、テンノウアミシマと言つた様に覺える。
天神様に參詣を遂げた。立派なお社、境内が狭うて氣の毒な、切創の膏藥賣の
傍に刃物賣りが居る、どちらも繁昌して居る。一番人だかりのして居るのは演
説使ひの處ぢや、何の商賣の爲に演説をして居るか、終ひまで聞かんで解ら
なんだが、聞いた丈では巡查の悪口であつた「巡查といふものは吾々が納めた
税で養つて居る奉公人、其の奉公人にビク／＼する事は無いでは有りませんか
ねエ諸君」と聲を張り揚げると、俺の隣の爪立つて居た丁稚がヒヤ／＼と叫ぶ

彼の演説使も此の丁稚も巡查を養ふ税金など納めさうな柄には見えぬ。天神の境内を出て、どう廻り廻つたか變な所に出た、往來に處々男やら女やら結構でない扮装の者共が路側軒下に立つたりうろついたりして居る、何か待合せて居る體とも見える。何かと聞けば車夫は小聲に言ふ、小聲は聞えぬ、聞きかへす、やつと解つた、一軒大きな家が相場をする所ぢや相な、近所の家は皆之に關係した仲買や何かの住居といふ、百萬圓の金も一刻に取つたり遣つたりする場所は此處等かと思へば身振ひが出る。あの立ん坊の男女共は何でも彼でも賭け事にするのぢやげな。氣味の悪い奴等ぢや、俺等の風體を見て耳打ちをする様なが多分何處の者何をする者かなど、賭けて居やう。大阪唯一の公園中之島は此處ですと、昔野は滅茶苦茶にくさす、俺は成る可く

褒めて見たいと考へて見たが、旨い褒め處が見つからぬ。銀行や何か花崗石の建物の立派なのは確に褒め立て、好いけれ共其れでは公園を褒めたに爲り兼ねる。見物序に裁判所に這入つた。今丁度好い處で、人殺しの裁判最中、上壇に冠をかぶつた人が五人、真中の三人が判事で、左が検事、右が書記ぢやと昔野が精しく教へる、教へて貰はんでも壯士芝居で覺えが有る。検事の服の赤飾りは昔の芝居の赤面に相應して居るけれ共、判事の紫飾りは其の意を得ぬ、むしろ辯護人の白飾りの服が似合はしい。しかし書記の青と検事の赤とに挟まれて居るから判事は紫に爲つたのか。検事は被告を極重悪人として死刑の請求をした。辯護人が起て長い事饒舌り立

てる、被告は至極の好色漢で斯ういふ事もやつた彼いふ事もやつたと平生の放埒な事を列べ立て、おまけに親から祖父の系圖まで洗ひざらひ、重代の助平なることを證據立て、色情狂に違ひないと自慢相に申張つて、とゞのつまりは寔に以て恐れ入つたる次第如何様の罪科にも行はせられいといふかと思へば、反對に無罪を言ひ立てた。強姪をして人を殺したのが色情狂といふので無罪に爲るなれば面白い、監獄は正氣の正直者が入る處ぢや。

(四十六) 大阪城

日本一の出世は太閤様
日本一の早く亡びた幕府

日本一の難儀を極めた築城

日本第一の出世をした日本第一の寛淵日本第一の醜男日本第一の無筆の天下様が築かれた日本第一の堅城は此處大阪城。それが日本第一に早く亡びた幕府ぢやから頗る妙、梅の桃の牡丹の藤の百日紅の木槿の山茶花の花のいろくに比べて豊臣家は櫻の様ぢや、ばつと咲き誇つてケロリと一夜の嵐に散り果てた。源平、北條、足利、新田、織田、徳川は本家なり分家なり其々由縁が残つて公侯伯子男爵の華族様として今の世にも血統を留めてあるけれども、豊臣家ばかりは譽も辱も軍書の外に何も残らで乾淨したものでぢや。

第四師團の正門に差掛る爪端上り、番兵が立つて居る、尤める、名刺を差出す、某部の某將校に面會と斷る、門を潜つて右手に番兵の頭が居る處に行けと教へ

られる、其處でまた名刺を出して用向を申述べる。番頭が帳面を繰り展げて何か認めて、兵隊を一人案内に出して呉れた、第二の門を潜る、電光形に幾度も曲つて行く、處々に青草が生えて居る、櫻も咲いて居る、桃も咲いて居る。案内の兵はさっさと先に立つて行く、短い劔がべたべたと腰を打つ。

『もし、もし。』と呼ばば兵隊は立停る。

『何でありますか。』と切口上が當世の武者言葉と見える。

『真田幸村の堅めた處は何處で御座らう。』

『分りません。』

『向ふの石垣の上に穴が有るのは何で御座るか。』

『われは銃眼であります。銃を託して射撃する所であります。』

『左様でありまするか、彼處から撃てば何處まで届きますぢやの。』

『小銃でも二千米突は有効なる射撃が出来ます、三十八年式の速射砲でありますと、八千米突に確實なる照準が出来ます。』

『真田の張拔筒は。』

『其は知りません。』

第三の門を潜れば廣場が有つて大きな役所が有る、兵隊は俺等を玄關外に待たせて、一人中に這入つて了つた。

見廻せば爰にも櫻が有る、芝生が有るが、度々の戦争に焼けたのか、大木といふ程のものも無い、石は評判通りに大きい、一つで五間も十間もわらう仰山なものぢや、此石一つを選ぶにとても千人や千五百人の力では運べるもので無い

よし何千人掛つても一日に五町とは動くまいに此大きな城を築き上げる夥しい石を好うも寄せ集めたの、天下の威光といふ者は偉いものぢや、若しも俺の法樂村で此の石一箇を百里も遠方から運ばせられたならば、三百戸足らずの寒村では、男總出で以て三代は費るに違ひない。想へば恐ろしいことぢや。

(四十七) 黄金水

袈裟五郎の名も齡も變つて立派な將校

金釜正宗と大阪城頭おほさかじやうじやうの黄金水

軍人の前垂まへだんぢや恐るべき大阪おほさかの同化力

勳章を五箇も佩げた將校が八左衛門の倅江田迅雄ぢや、幼名は袈裟五郎と言う

だが、教導團に入るときに齡も名も變つて天晴の軍人と爲つた、法樂村の出世頭で正七位勳五等功五級年金三百圓は隣數箇村に無い名譽ぢや。郡長よりも上と言へば俺が眼にも昔の袈裟五郎とは見えぬ。然るに其の昔を忘れずに藪野様と敬うて呉れるは誠に勿體ない。

『オイ、コラ、コーツカヒ』と號令の下に洋服男が走つて來た、之に俺等の外套や風呂敷包を預らせて、江田自身に天主の案内をして呉れる、路々幾度か兵隊が手を舉げて敬禮する、江田に敬禮するのとは解つて居ながらも俺等も矢張り敬禮の相伴を享けた様でだまつては居られぬ、一々に帽を脱いで腰を曲めるちと面倒にもある、陸軍の禮は仰け反つて睥みつけて手を舉げる丈で便利なのは羨ましく。

天主の址は何も無い、何も無いが高いから眺望が好い、麥、菜花、桃、櫻、屋根、煙筒と町も村も幾十里見ほがしの大きな景。

黄金水といふ井戸の底には大判小判が沈めて有るといふ、金釜正宗と同じ驕ぢや。金釜は東郷大將の銘で名高い、此の井戸には加藤清正の銘が欲しかつた。

「何にも御覽に入れるやうな珍らしい處も有りません、今日は私ももう退けますから怎麼でせう私の宅に御遊びに御出下さいませんか。」

と江田正七位殿の慇懃は誠に以て恐れ入る、お言葉に甘へて、一緒に城門を出る、先刻と違つて門番が丁寧に敬禮をする、鐵砲を捧げてギクリと此方に向く喰ひ付き相なのが勇ましう。

十數町にして江田殿の御邸に届いた。格子戸のチンマリとした家で、オイと號

令すれば駒下駄の音カラコロと土間を走つて来た女が格子を開く、まだ此の晝間に鎖し堅めてある、嚴重な事かな、格子一重が天晴城郭、流石に軍人の住居御手狭なお邸で三間ばかりもあらう、大廣間が六疊で上座の九尺が三ツに仕切つて床と差ひ棚と押入とに爲つて居る、縁側の外に四坪ばかりの庭が有つて小面倒臭く築山も泉水も揃うて居る。

奥方にお引合せが有つた、先刻格子の城門を開けられた人で、二度の見参であるが、此の度は黒縮緬の羽織を一着に及ばれてお見それ申すばかりの御姿。

「江田君居るかッ」と飛込んで来たお客に、主人も俺等も面喰つた。紫炭鬚の逞しい男色が赭黒くて、額の半分以上は白い、ボン／＼ボン／＼早口に饒舌つて「翌から野外演習だ、歸つてからゆつくり」と言つて忽ちに去つて了つた。

昔野はわッけに取られて。

『江田さん今の方は何です。』

『なアに隊附の中尉です、此の頃轉隊して來たんです、驚いたでせう。亂暴な男ですがネ、今に屹度サカイのオマヘンと言ふ様に爲つて、前垂でも掛け、來る様に爲ります、大概の者が二三年經つと皆さうです。大阪ほど消化力に富んだ處は有りません、教師でも官吏でも軍人でも悉く商人化せずには置きません。』

(四十八) 築 港

棧橋——生きた惠比須様

天王寺——名を萬世に継かす

近松——西御——一時間に千句は嘘

築港は壯大極つた仕掛で、一里も遠く沖合に土手を築き出して港を作つてある、二千萬圓とか費つたといふ、流石に大阪人の膽玉は大きい。廿間も三十間もある大艦が横附に爲つて居るのは川魚料理の舟とは土臺較べ物にならぬ、棧橋の上も中々賑かで、二十人も三十人も魚を釣つて居る、活きた惠比須様の様な顔ばかりで皆お目出度い。今宮の戎様に詣つて少々許り御願ひ申してずつと東へ天王寺に車で赴く。

京都大和以來またなつかしい五重の塔が有る、境内境外拾く歩く、満開の櫻に故園の春を想ひ、芽生えの萩に親爺殿が待つて御座らうと歸りたくなる。

二丈六尺の大鐘おほしりのかねが有る、幾錢か出せば其裏に名前を彫つて呉れて、鐘搗かねつくた
ンび名は萬世ばんせいに轟とどろくといふ、其れも好よいがやめにして俺わしは三十錢出せんだして、其
の大鐘おほしりのかねの型かたを模うつした玩具おもちゃの鐘つりがねを買かひ求めた。

生玉高津いくたまかうつも參詣さんげいを了をへて、さて何處どこに行いかう、何處どこに行いかうといふのは餘あまり行
き處ところが多おほうて困こまるのぢや、見物けんぶつももうくたびれた、吾家うぢの鹽しほからい味噌汁みそしるが戀
しうなつて來た、併しかし考かんがへて見れば明日あすを頼たのまれぬ身みの上うへ、またノラクラと家うち
を出でて幾月いくつきも見物けんぶつに暮くらすといふことは覺束おぼつかない、折角せつかくの序ついでぢやから辛抱しんぱうし
て見物けんぶつしておかう、見物けんぶつも辛抱しんぱうしてやる様ようになつては中々なか大儀たいぎなもの、ちと村むら
の小前こまへのものでも連れて來て代かつて見物けんぶつさせてやりたいものぢや。

「叔父様おぢさん、近松ちかまつの墓はかに參りませうか、我國わがくにのセーキスピヤとして誇ほこるべき此この

文豪ぶんごうを、貴方あなたが訪まもらつて下くださらんといふことは有りませせん、近松翁ちかまつをうも定さだめて

地下ちかに喜よろこびませう。」

「椋十むらじゆの名なを近松ちかまつが知しつて居ゐる譯わけぢや無し、何喜なによろこぶもんか、村むらの和尙わしやうさま様が話はな
しに近松ちかまつの墓はかは幾箇いくつも有あるさうぢや、肥前ひぜんにもあり、筑前ちくぜんにもあり山口やまぐちにも
ある、山口やまぐちには其その子孫しよん代々だいでの墓はかもある、其血統そのけつたうの家いへに泊とつたことか有あつた
と言いはれた、大阪おほさかの墓はかはどうした墓はかぢや知らんが、本物ほんものか偽物にせものか。」

「其れや貴方あなた名高なだかい人ひとに爲なると幾箇いくつも墓はかは有あるべき筈はずです、大阪おほさかのが本當ほんたうです、
よし本當ほんたうでなくつても好いいぢや有りませんか訪まもらひませう、其れに二萬翁まんをうの
墓はかも近所きんじよだといひます。二萬翁まんをうですか、井原西鶴いへんさいかくと言いつて大小説家だいせうせつかの大俳人だいはいじん
です、一日いちにちに二萬三千句まんさんせんくを吟ぎんじたので有名いうめいなのです。」

『昔野お前も涙が出るか。』

『畜生此んな脚色をしやがつて人を無理に泣かせアがる、外の人も皆泣いてまさア、泣かずに居られない様にして有るンですもの、其れにまた三味線の奴がサア泣け〜と嗾しかけるでせう堪りませんや、くすぐられて笑つたつて笑ふ方が悪くかア無いでせう、だから私が泣いたつて不名譽には爲りません。一體近松以後の悲劇家は死の外に何等の悲哀の原因も知らなかつたンでせう』。

と昔野は涙拭き〜怒つて居る、可笑しい奴ぢや。

随分大きな人形が出る、人形一箇に使ひ手一人のもあるが、或は三人も附いて居るのもある、附手の多いのはエライ役に極つて居る。一番嬉しいのは眉がピ

クビク昂つたり低つたりする、人間のより人形の方が自由ぢや。斬られた首がボンと飛ぶのは見事ぢや。眼も口も指も動く、どうしても木竹で做つたものと思へぬ。それを使つて居る社禰の兀頭が、どんな場合にでも眉毛一本ピリ、ともさせぬ、人形に情が有つて生きて居る代りに、使手は情も意も無くなつて了つて居る。

幕が引かれる、おもしろい幕がある。株式取引所仲買人何某といふの、次には、帝國鐵道廳のが出る。攝津大掾丈へとあつて、伊勢參宮や宮島參詣、奈良見物、笠置探勝、宇治遊覽などの案内が廣告してある、不思議な世の中に爲つたものぢや、昔野は、今に學校の生徒募集廣告や議員候補の引幕が出るぢやらうと言つた。

『一日に二萬三千は多いな、其れは一晝夜にか、一時間にぎつと千句に爲る、篇と勘定をして見てくれ。』

(四十九) 文 樂 座

攝津大掾は大阪府事務官
羅漢の様子、人間離のした貌と藝
鐵道廳の廣告と議員候補の引幕

文樂座に操人形を見た。
攝津大掾といへば今日の世なら大阪府事務官とかいふものぢや。併し府縣の事務官などよりすつと此の淨瑠璃語りは貴い、日本一ぢや。

好い顔ぢや、眉が長うて羅漢様の様、貌からして人間離れがして居る、藝はといふとちと困るが、俺ぢやとて子供の時から淨瑠璃と琵琶と祭文と替女歌は耳熟れて居る、淨瑠璃の節と替女歌とは大分違ふといふことも心得て居る。攝津の大掾の淨瑠璃は其心得て居る節とは全然違ふが不思議ぢや、替目歌と違ふ計りでなく、此座中の外の語り手とも違ふ、一口に言へば節といふ様なものはさづ無い、勝手に演説をして居る、それで神祇釋教戀無常、喜、怒、哀、樂、愛、惡、慾、七情のつぼくを極めて居るから奇妙ぢや、して見れば節などいふ者はどうでも好いものぢやな。俺も此から工夫して一流始めてやらう。藝題は何か忘れた、中途から聞いたで解らんのだが、無暗に人の死ぬる仕組ぢや、それでさア泣け〜と責め立てる、勿論俺は泣いた。

『昔野お前も涙が出るか。』
 『畜生此んな脚色をしやがつて人を無理に泣かせアがる、外の人も皆泣いてまさア、泣かずに居られない様にして有るンですもの、其れにまた三味線の奴がサア泣け〜と嗾しかけるでせう堪りませんや、くすぐられて笑つたつて笑ふ方が悪くかア無いでせう、だから私が泣いたつて不名譽には爲りません。一體近松以後の悲劇家は死の外に何等の悲哀の原因も知らなかつたんでせう。』

と昔野は涙拭き〜怒つて居る、可笑しい奴ぢや。

随分大きな人形が出る、人形一箇に使ひ手一人のもあるが、或は三人も附いて居るのもある、附手の多いのはエライ役に極つて居る。一番嬉しいのは眉がピ

クビク昂つたり低つたりする、人間のより人形の方が自由ぢや。斬られた首がボンと飛ぶのは見事ぢや。眼も口も指も動く、どうしても木竹で做つたものと思へぬ。それを使つて居る社禰の元頭が、どんな場合にでも眉毛一本ピリ、ともさせぬ、人形に情が有つて活きて居る代りに、使手は情も意も無くなつて了つて居る。

幕が引かれる、おもしろい幕がある。株式取引所仲買人何某といふの、次には、帝國鐵道廳のが出る。攝津大掾丈へとあつて、伊勢參宮や宮島參詣、奈良見物、笠置探勝、宇治遊覽などの案内が廣告してある、不思議な世の中に爲つたものぢや、昔野は、今に學校の生徒募集廣告や議員候補の引幕が出るぢやらうと言つた。

(五十) 神戸

大阪と神戸本家と分家

楠公神社と千早の籠城

生田、布引、諏訪山、淡路島

大阪から神戸に到る道中には、源平新田足利以来の戦話して記えて居る處の名が點綴つて格別に面白い、日本外史の中を歩行く様なもの……とは地圖を見た時の考へで今日實際通つて見ると大阪神戸は町ついでと言つて好い、大阪が擴がつた其の端が神戸ぢや、神戸はまた兵庫須磨舞子明石と隣國の播州に煙突の林を植ゑ擴げ居る。

神戸はつまり大阪を本家とする分家ぢや、本家は舊く分家は新しい、和田岬の湊川のといへば舊い古蹟ではあるけれど、神戸市といへば全くの新開地ぢや、開港以來五十年も經つたこと故少しは舊い家も有りさうなと思ふが傾と其れらしい家は見當らぬ。

神戸一番の見物どころは波止場ぢや、世界の人間が一時に見られる、黒ン坊、白ン坊、芥ン坊、赤ン坊、色々の外國人がざわつく、其の中には日本人も居るけれども此の波止場が日本とは思へぬ。

繁昌な街は大阪よりも路が廣くて家も高い、店看板は皆横文字、日本人に買つて貰ふ考へは無いさうな、下駄屋の看板にまで横文字が有るのは餘りぢやとも思ふたが、熟く考へて見れば神戸の日本人に横文字の解らぬ者はないのぢやら

う。
見物の塲所はやはり神社佛閣ぢやと、第一等高い楠公社に詣る、神戸の真中に在つて白木造の新しい小さい社ぢや、遊廓や見世物に取巻かれてドンチャンドンチャン騒がしい物の音は、千早籠城の昔が偲ばれる。
嗚呼忠臣楠子之墓、園をしてあるから近寄つて熟く拜見する譯に行かぬ。寂しい野原の中に蔭にからまれて此の碑が有つたらおもしろからうとも一寸思つて見たが、いや／＼其の様な世の中に爲らいで結構、世の中にまだ忠孝の道が廢れねばこそ此の繁昌、石碑の繪葉書も賣れるのぢや。
生田の森こそ神戸第一の古いもの、古いものは神戸には不向、依つて生田神社は寂し。

布引の瀧といふ處は、行きつく迄の坂道と松の樹が好い、瀧は頼と見ばえの無いもの、笕の水で無いことは解つて居ながら、どうも作り物の瀧の様な氣がする。瀧に後を向けて港の方を見渡せば眺望が好い。更に好い眺望は諏訪山の公園ぢや、左は西の宮住吉より御影、和田の岬を真中にして右は須磨に亘つて十萬の人家鱗の重なつた様。ほの／＼と霞に遠き島影は淡路、四國、紀州の山々其の間にきら／＼と春の日光る海は風。千船百船織るが如きわの中には俺の様に見物に来るものもあらう、歸る者もあらう。

(五十一) 和歌の浦

和歌の浦あかの浦ばかの浦

大きな繪屏風小さい貸し馬

和歌の浦は昔若濱と言うたのを、聖武天皇様が御見物なされて向後明光浦と書けいと勅諭が有つたとやら。アカとワカとは同じ言で、今の世にもわたくしともあたくしともわつちともあたいたも通用致して居るが現の證據ぢやとか。わかひものはわかひものぢや、木の芽でも人間の子ども皆。

其れはさうとして。此の浦が聖武天皇御見物の昔から明るかつたことは疑ひない、人皇百二十一代の今日唯今此玉津島山に登つて見ても、空も水も暉りわたつて薄とぼけた若野が面まで、はつきりと見える。

民の窻は賑ひにけり——と繁昌は結構なれども人家稠密な處は煙が多く塵が濃うてどうしても明るく無くなる、和歌の浦はまだ電車の便もなく大都會にも遠

いので須磨や明石や大磯や鎌倉の様に別荘といふ町も建たず製造所の煙も捲かず、またく當分の處明光の浦の改名を致すに及ぶまい。

大きく彎つた砂濱、處々の松原、村里、田圃、川、橋、寺、社、丘、山、峰と數々の景が都合よく散らばつて見える、丁度天然自然の大きな繪屏風。俺が見物をした諸國の景色の中に此れ程手の込んだものを一目に見られる様寄せ集めた處は無かつた。

山を下りて細かに見物を始めると、格別此れはといふ見處は無い、樹や岩の格好幾分おもしろいものも有るけれども取り立て、言ふにも當らぬ、樹も岩も小さい、寺も社も小さい、松原も小さければ濱邊も小さい海も小さく浪も小さい、小さい子供が小さい馬を牽いて行く、俺を見て騎らんかといふ、調戲にいふか

と思つたら貸し馬ぢやげな、向ふの長い土手を二人馬で走つて行くのを見れば面白さうぢや、俺も農馬に騎つたことはある、西洋鞍の経験は無いが、裸馬より騎り悪いことはなからうと、不圖好奇が起つて其の小さい馬を借りて飛び乗つた。ハイ〜と言ひつゝ手綱を搔い繰れば馬は心得て歩み出す、農馬と違つて妙に首を擧げる、是れでは足元が見えまいと險脊に思ふ。ちと驅けさせて見ねば面白味が薄いと思ふ中に好い鹽梅に走り出した。體がピヨンピヨン躍ね上つて鞍の上にトン〜尻餅を搗く、危ない〜とどん〜と驅ける。止と言つても動と怒鳴つても、言葉が違つて分らぬのか、走り止まぬ。何の此の小馬奴がと力一杯に手綱をグイと引締めて仰反れば、左の手綱がぶつとり断れて、クルリと右へ馬の首が、バツタリ俺は芝の上に、落ちたけれども

不思議に何處も怪我は無い、砂打拂うて立上れば紀三井寺が浦を隔て、對岸の山の半腹に拜まれる。あら有り難き御佛の御加護や。馬は平氣で道側のアカ草を食み〜、ざまア見ると言はん許りに此方を見る、俺が爲には馬鹿の浦ぢやつた。

(五十二) 送別會

飯を食はずに宴會に出る不覺

儲け話でも腹は塞がらぬもの

月は朧 名残の熱燭更に一杯

明日出發と言ふので郷里の者等が、送別會を開いて呉れた。大阪第一等の料理

店に坐つた處は好いが、座敷が廣いだけ氣が小さくなる。六時の案内に三十分過ぎて俺等叔姪の外に主人側は藥屋の阿米橋が來て居るばかり先刻から茶ばかり飲んで腹が脹れた、いよゝゝ氣が滅入る。

併し阿米橋が出世話は興がある、郷里から出て僅か五六年の中に一角の身上を作つた、大阪の手練の商人を相手に田舎者が仕上げるといふのは不思議の至り、彼は律義一方の外に取柄は無い奴ぢやつたが、財神もやはり正直の頭に御宿なされるのぢやな。

展げた地圖の上に阿米橋は、此處もゝと鉛筆で圈を點けてさて言ふ――此が皆遊廓。此通り大阪は遊廓に挟まれて居る。商用其外の談合は皆此處で、美人に酒を強ひさせながら談判をやる。客も野暮を言つて居られなくなつて話が早

く片附く、商略上には便利な茶屋揚屋なれども、自然に商用以外にも足は繁くなる、勢ひ外に何かの費用を節せねばならぬ、まづ家の生計費に切込む、奉公人の手當を薄くする。大阪の奉公人など惑な者は無い、月に三圓か五圓の月給を貰ふばかりで、食物と言へば月に一度が二度腹さを喚がせられるが關の山、其れでは堪らないから隠喰ひをする、大きい奴はまた外に使錢が要る、他處に盗みに行くより手近の自分の店の物を胡麻化す、安い月給が高いものに爲る。

主人の遊蕩費と奉公人のクス子金とは皆品物に掛る。此處が目の着け所で、自分は一切茶屋揚屋で用談をせぬ、招かぬは勿論呼ばれても行かぬ、其れが嫌な人とは取引を断る。自宅でやれば贅費が要らずに用は早く捌ける、一方には奉公人の手當を厚くしてクス子すとも濟むやうにして。三方四方から出る利益は

皆品物の直に懇いて他店よりもずつと安い品が客に交る、繁昌すまいと思つても繁昌する——と阿米橋は訥辯ながらはつきりと述べ立てた。

七時が過ぎて十五分に爲る。儲け話でも腹は塞がらぬ、夕飯を食はいで大阪の宴會に來たのは俺が不覺ぢやつた。子供の時から近畿の癖が有る此方ぢや、萬一目を廻しては不體裁ぢやから何か買つて食はうかと苔野に相談中、ぼつくと人が來て豫定の主客十人が揃うた、挨拶半に膳が出た。女子供もぞろぞろ來た、やれ安心と一杯飲めばジーンと總身に沁み渡る、四五杯重ねれば勇氣凛々と相成る。

是に於て膳の上から目を離す、座敷は大分ざわついて居る。苔野は頻に恐悅聲を揚げて饒舌つて居る、眼中先生が一人の女を拉まへて苔野の前に引据ゑた。

『まア嬉しいわ、貴方、東京の方なんて滅多に會はれないことよ、かうして御話して居れば東京に居る様で、氣が變になつちやつてよ、貴方、わたし今日は酔ふワ、御免なさいよ、ねエ、一寸怒つて、よッ。』

『なに怒るもんか。』

『だつて黙アツてらしやるんだもの、何とか言つて下さいよ、ねエ。』

『何と言ふんだねエ。言はうと思ふんだけど言はれないぢやないか、英雄の心緒亂れて糸の如しか子。』

『わらッ！ 貴方生意氣に文藝の趣味があつてよ、まア感心話せるわ。』

『話せるわ——は恐れ入つたね、恐れイルミネションは怎麼だ。』

『地口なんか下司張つたことを貴女に向つて言ふもんぢやなくてよ。彈ませ』

「う何かお歌ひなさい。」

「聞かしてやるか。」と何か歌ふ。

「文句は満足だネ、だけど丸ツきりネ、出所を違へてるわ、それア一體何だと思つて歌つてらッしやるの、常盤津の積でやつてらッしやるの、まア。」

「黙つて聞け」と言ひながら又歌ふ藝妓は皆まで聞かずに。

「そんな聲はない、日本にないや、上手に無い……上手に無い下手外れですよ、だけど拙くて結構、なまじ巧いとびツくりするよ。」

「此い奴口の悪いオイ君眼中君、君一つ驚かしてやれ。」

「よし来た。」

「貴方もやるの、およしなさい、黙つて聞いてれア奥が知れなくて好い事よ。」

「くそッ！驚くな、さア都々一だぞ。「花をあるじに木の下かげでむすンで見たいよ蝶の夢……。」さア此から歌澤だッ。」

「歌澤！先生お罷しよ其んな柄ぢやないや。併しネ、聲は天稟だから堪忍して上げるはネ、歌ひまはしに上手下手が有るンですよ、さア一つやつて御覽なさい、わッ其ンなもの、拙づ過ぎる……。」

「亂暴な物言をする藝妓ぢや、苦野と眼中先生とは藝妓に罵られながら東京者がつて有頂天に爲つて歎んで居る。」

「俺が側には大阪生粹と覺しい小娘が三人取り圍いて居る、わんな東京藝妓とは、山犬と狎ほどの違ひ、優しい手附、やアさしい聲で何かと話す、今宵限の大阪ぢやと坐ろに名残惜しい様な氣もする、折しも二十日の月は朧に窓からさし込ん

で来た、更に熱い烟を命ずる。

上方見物終

明治四十一年六月十二日印刷
明治四十一年六月十五日發行

定價金六十錢

郵税金六錢

著者 澁川柳次郎

發行者 東京市麴町區有樂町三丁目一番地 田中源三郎

印刷者 東京市橋區築地二丁目二十一番地 岡功

印刷所 東京市橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社



發行所 東京市麴町區有樂町三丁目一番地 有

樂社

電話本局二〇九五
振替口座三六〇

有樂社發行書目

日本一の
漫画雑誌
東京パックス

- ◎新聞半載大十六頁石版美麗印刷
 - ◎毎月三回一日十日二十日發行
 - ◎一冊定價金拾三錢 (郵税共)
 - ◎十部前金壹圓二十五錢 (同)
 - ◎二十部前金貳圓四十錢 (同)
 - ◎三十部前金參圓五拾錢 (同)
 - ◎海外諸國一ヶ年前金五圓五十錢 (同)
- 北澤樂天君獨創の狂諧で、世を諷し俗を罵り、一見アツと感歎し、アツハツハツハと哄笑せしむるもの、海内たゞこのパツクあるのみなり。年中、青筋張りて眉間にしわを寄せ居らんことを希ふものは、之を見ること無用。

常識 函巻
天下第一
東西南北

- ◎四六列倍 百二十頁
 - ◎毎月一回 一日發行
 - ◎一冊定價金拾五錢 (郵税一錢半)
 - ◎六部前金九十三錢 (郵税共)
 - ◎十二部前金壹圓八十三錢 (郵税共)
 - ◎海外諸國一ヶ年前金貳圓六十五錢 (郵税共)
- 三面六竹的雑誌なり、社會各方面に亘り政治經濟、文學、宗教、科學、美術を説述評論す。東西の名士に傾聴し内外の新聞雑誌を涉獵し最新の思潮最新の智識を供給す。内容豊富、叙述簡明、精を抜き粹を競ふ、多忙なる事務家にも餘裕ある讀書家にも無二の好讀物にして國運の伸張發展を促す世界的雑誌なり。

有樂社發行書目

樂みながら英
語の勉強が出来る
英學界

- ◎四六倍判四十四頁舶來上等紙印刷
 - ◎毎月一回五日發行年四回一、四、七、十月定期増刊發行
 - ◎普通號一部金拾錢 (郵税金一錢)
 - ◎増刊一部金二拾錢 (郵税一錢半)
 - ◎八冊(内増刊二冊)前金九十錢(郵税金十錢)
 - ◎十六冊(内増刊四冊)前金壹圓七拾錢(郵税金廿錢)
 - ◎海外諸國一ヶ年前金貳圓四十錢(郵税共)
- これ、中學程度の、英語研究唯一の雑誌なり。全冊、趣味の二字を離れず、蠟を嚼む如き講義録類と全く其の面目を異にす、殊に挿む所十數面の繪畫は、悉く精良鮮美、内容の豊富、外形の美、英語雜誌界他に類例を見ず、試に一冊を繰きて、過賞ならざるを知り給へ。

日本一の
少年雑誌
フレンド

- ◎毎月一回 一日發行
 - ◎一部金拾錢 (郵税共)
 - ◎六部前金五十五錢 (同)
 - ◎十二部前金壹圓 (同)
- 東京パツクの分身で、日本一の面白い少年漫畫雑誌であります。

日本エスぺラント

- ◎毎月一回五日發行
 - ◎一部金拾錢 (郵税共)
 - ◎十二部前金壹圓 (同)
- 右は世界國際語たるエスぺラントを研究する日本エスぺラント協會の機關雑誌にして、世界各國に通信員を有し材料豊富尙後世界を漫遊せんと欲するものには必讀の研究雑誌なり。

目書行發社樂有

再 版

大 阪 朝 日 新 聞 所 載
人 物 畫 傳

菊 版 二 百 五 十 餘 頁 定 價 金 四 拾 錢 郵 稅 六 錢

大阪朝日新聞編輯局の所謂不等邊三角形の卓上に編せられたる畫傳なり。而も畫傳子の觀察。不等邊三角形にして、文字不等邊三角、列記人物亦不等邊三角形的なり。不等邊三角的とは果して何の謂ぞ、蓋しこの書を讀まざるものは解し能はざるなり。其の人を知るものは其傳記を讀まんと欲し、其人を慕ふものは、其傳記を知らんと欲す、此書收むる人物今人を主とし、古人を従とす、貴賤、男女を別たす畫傳子の觀て人物となすものは、網羅し或は直覺に、或は側面に、縱横評論記述す、一人を讀めば、更に一人を讀まんと欲して、卷を終へ尙足らざるを思はしむ、文字の巧なるに非ずして何ぞや、撰擇宜しきに適せるに、非ずして何ぞや。

挿入、百人百個の寫眞、英雄豪傑、賢哲、美人、皆諸君を書齋に訪ふ、豈快ならずや。

目書行發社樂有

楚 人 冠 杉 村 廣 太 郎 著

大 英 遊 記
四 版

菊 版 四 百 二 十 餘 頁 插 畫 大 小 五 十 餘 箇
定 價 金 四 拾 二 錢 郵 稅 金 十 二 錢

東西兩朝日に連載せられて、幾十萬の讀者に其の文と想と技の凡ならざるに感歎せしめ、本書と成るに及んで更に東西諸名士より賛同を給はる事夥だし、左に一二を掲げて其の眞價を示すべし。

京都帝國大學講師内藤湖南氏曰く

我國の紀行文中、此くの如く長篇にして、而も此くの如く面白き妙文は、明治文壇未曾有の産物なりと。

國民新聞主筆徳富蘇峰氏其紙上に於て曰く、

「此れは記者の眼と、文人の手とを遺憾なく、發揮したる、一種縱横流の快心快讀の好遊記なり」と又曰く「其情趣躍々として、紙外に活動す」と又曰く「筆を使ふ舌を使ふが如く、舌も猶及ばざるの概あり」と。

實業界の巨人淺澤榮一男曰く

楚人冠の大英遊記は文辭輕妙にして飄逸、叙事多面にして徹底、會遊の経験なき者にとつても、其深の感興を興へ、會遊の経験ある者にとつては、更に至深至大の感興を興ふるものなりと。

目書行發社樂有

和 田 北
田 樂 澤
子 天
著 備

新 西 洋 笑 府

定 價 金 稅 郵
壹 金 八 錢

長者の嚴めしき小言を聽いて居て、ふと欠伸する人あらば、な
かしがるべし。それは定めて其部屋の空氣が濁つて居た爲めで
あらうと理窟に陥いる人あらば、此もなかしがるべし。此の二
種の人をさしおき、其餘の人は皆此本を讀む資格あるなり。

東 京 市 越 前 區 有 樂 町 三 丁 一 目

有 樂 社

振 替 口 座 三 六 〇

目書行發社樂有

界 利 彦 編

平 民 科 學

全 部 六 冊
每 冊 四 十 六 頁
百 七 十 八 頁

定 價 一 部 金 參 拾 錢 郵 稅 四 錢
六 部 前 金 壹 圓 六 十 五 錢 (郵 稅 共)

最近科學の、思想を説くに平民的文學と平
民的情緒とを以てしたるもの、知識と趣味
と、最も宜く此篇中に融和せり。

- 第一篇 人間發生の歴史 既刊
- 第二編 植物の精神 既刊
- 第三編 男女關係の進化 既刊
- 第四編 動物界の道德 既刊
- 第五編 地球の生滅 六月末發行
- 第六編 萬物同根一族 七月末發行

山 口 高 等 商 業 學 校 教 授 佐 々 木 文 美 先 生 著

再 版

英 文 作 文 構 成 法

再 版

四 六 版 一 〇 五 頁 〇 答 解 部 共 全 二 冊
定 價 金 卅 五 錢 〇 郵 稅 金 四 錢

佐々木先生が英
作文構成法を説
くの妙は眞に當
代獨歩たり
此の新著の價値
豈に多言を要せ
んや
英作文構成法の
堂奥に容易く到
達せんとする者
は本書を見るべ
く、趣味ある獨
特の英作文教科
書を知らんとす
る者は本書を讀
め!!!

有樂社發行書目

英文書類一覽

英文 今上御詠集 定價金拾圓小包十六錢	袖珍 官職名集 定價金十錢郵稅二錢	英文 日本魂 定價金壹圓郵稅八錢	英文 太閤記 定價金一圓郵稅八錢	英文 良人の自白 定價第一、六十錢第二、七十錢郵稅各四錢	英文 紀文大盡 定價金五十錢郵稅四錢	英文 金色夜叉 定價第一、七十錢第二、六十錢郵稅各五錢	英文 不如歸 定價金六十錢全二冊註釋附郵稅金六錢	英文英語 如何にして 余は英語を學びしか 定價金二十錢郵稅四錢	英文英語 大人物の 少年時代 定價金二十錢郵稅四錢	英文英語 世界奇聞 定價金二十錢郵稅四錢	英文英語 やさしい會 話と對話 定價金二十錢郵稅四錢	英文英語 手紙の書き方 定價金二十錢郵稅四錢	英文英語 東西お伽噺 定價金二十錢郵稅四錢	附答 英作文構成法 定價金五十錢郵稅四錢	和文英譯軌範 定價金三十錢郵稅四錢
---------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------	------------------------------------	--------------------------	-----------------------------------	--------------------------------	--	------------------------------------	----------------------------	-------------------------------------	------------------------------	-----------------------------	----------------------------	----------------------

澁川玄耳氏著

閑耳目

定價 小包金 八錢

本書は社會各方面に關する、叙事と評論とより成る、無邪氣が皮肉か婉曲か傍若無人か奇想奇聞變幻窮りなし。一たび之を讀まば誰れか快哉を叫ばざらん而かも仔細に之を看れば一貫の情味掬すべきものあり。

發行所

東京日本橋區通四丁目

春

陽

堂

電話本局五一

從軍三年

中村不折氏口繪
名取春僊氏裝釘

定價 九拾錢
小包料 八錢

日露戰役の文學的產物として唯一の好評を博したる本書は百萬從軍の士に代つて有らゆ
る從軍の辛酸と愉快とを諸士の子孫に傳ふべき好紀念なり。德富蘇峰氏の月旦は以て本書
の一斑を窺ふ可きなり。

本書に對する國民新聞批評

吾人は多く軍事通信中に於て、朝日新聞紙上に、軍陣生活の隨筆めきたる通信を愛讀し、其の筆者を物色したりき。
今や愛讀したる通信文は、「從軍三年」の一書となりて、澁川玄耳の正銘を打つて、吾人は之を再讀して、
尙ほ初讀の印象の依然として、濃かなるを覺えたり。

◎森博士の「うた日記」は、文に於て勝り、此書は實に於て勝る。彼は書物臭
較論せんとするにあらずされども。三十七八年の副産物として、此の一書は
るを運送す。

◎著者は其の著者たる者にあらずき。彼は第六師團の理事として、出征したる

也。其の軍略、其の如きは、彼が自から關知する所にあらず、吾人亦た之を以て、
の軍隊生活の内情に到りては、僅かに此書あり、聊か其の真相を髣髴せしむるを得る。
「參謀本部編纂日露戰史と云ふ何萬頁の大著述」以外に於て、從軍の苦樂を看取し、無
却て此の、陣中の樂書たらずんばあらず。

◎著者の筆鋒は、犀利なれども、其の觀察眼は、更らに犀利也。其の興趣の多角的なると同時に、其の同情の範圍、
又た頗る狹隘ならず。彼の眼中には、滿洲の濁流も、蕪原の柳も、狼よりも猛き犬も、漠々たる風沙も、或は道傍の
撫子、石竹も、驢馬も、兎も、抑も亦た將軍も、馬卒も、大砲も、飯盆も、讀書人も、苦力も、一として彼の資料た
らざるはなし。一切の有情、非情、彼の筆に上りて、活躍せざるものなき也。

◎加之著者に一種の滑稽的趣味ありて、如何なる沈痛なる場合に、俳味、諷刺を加味せざるなく、爲めに動もすれ
ば人の頭痛を穿々たらしめんとする一刹那。乍ら煩惱の雲破れ、覺えず我をして呵々大笑せしむ。

◎「沙河の合戦」の如きは、大題小做、素人には大會戰記よりも却て面白し。「陣屋の二十四時」と「續陣屋の二十四時」
は、寧ろ前者を逸品とす。されど歴卷は「戰場の兎」なる可し。此の一文には、殆んど總ての著者の眼と手が働きて居る
を認む。此書は本邦人の作りたる戰役側面觀として、最も實質あり、興味あり、價值あるの一と信す。(東京だより)

東京日本橋區通四丁目

發兌元

書肆春陽堂

中村不折畫 夏目漱石序

東京見物

定價金五拾錢
郵税金六錢

●本書を讀んだ地方人は

東京者に馬鹿にされぬ

●本書を讀まぬ東京人は

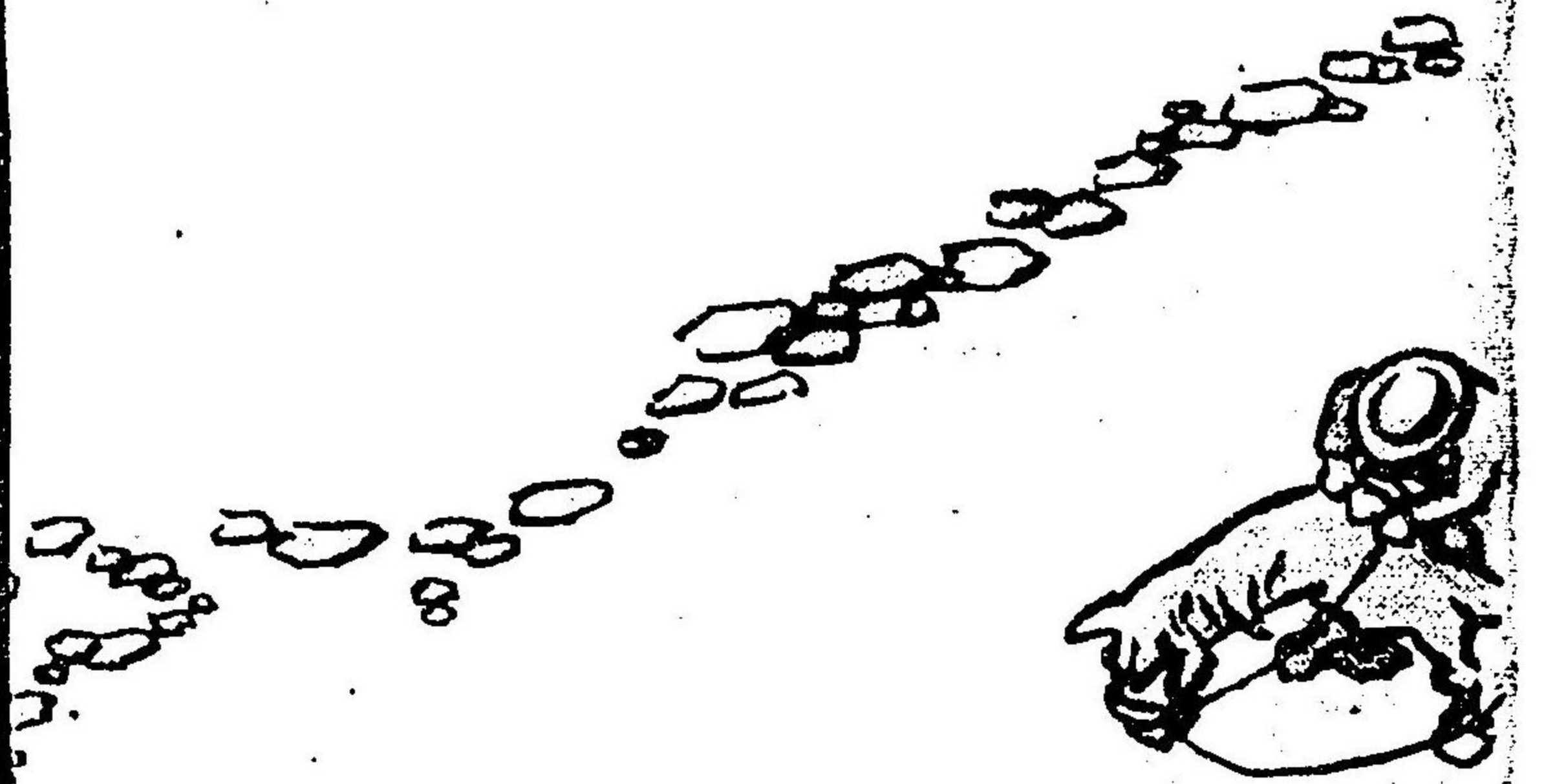
田舎漢に馬鹿にされる

發所

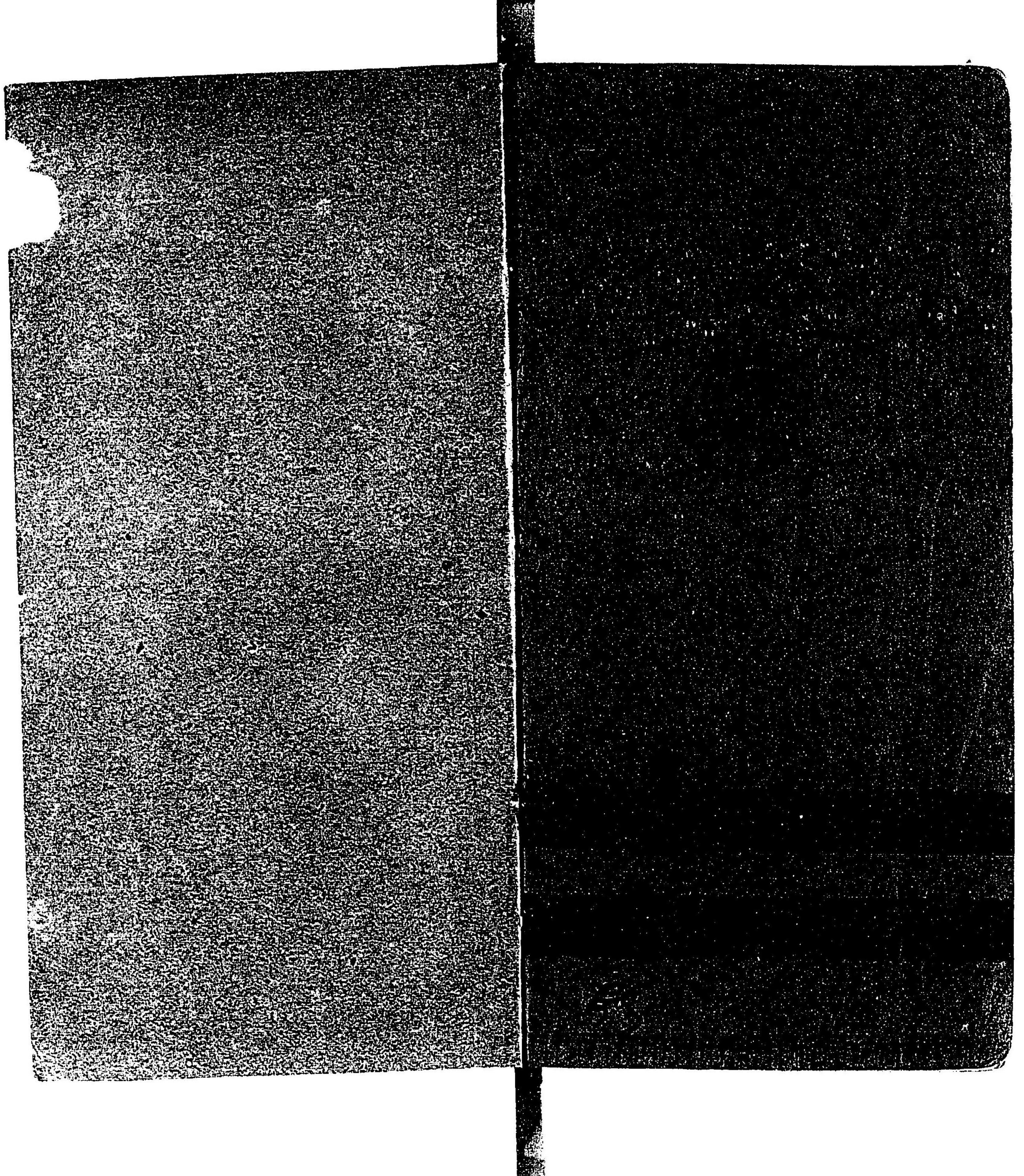
東京市日本橋區
中橋廣小路

前川榮閣

31
527



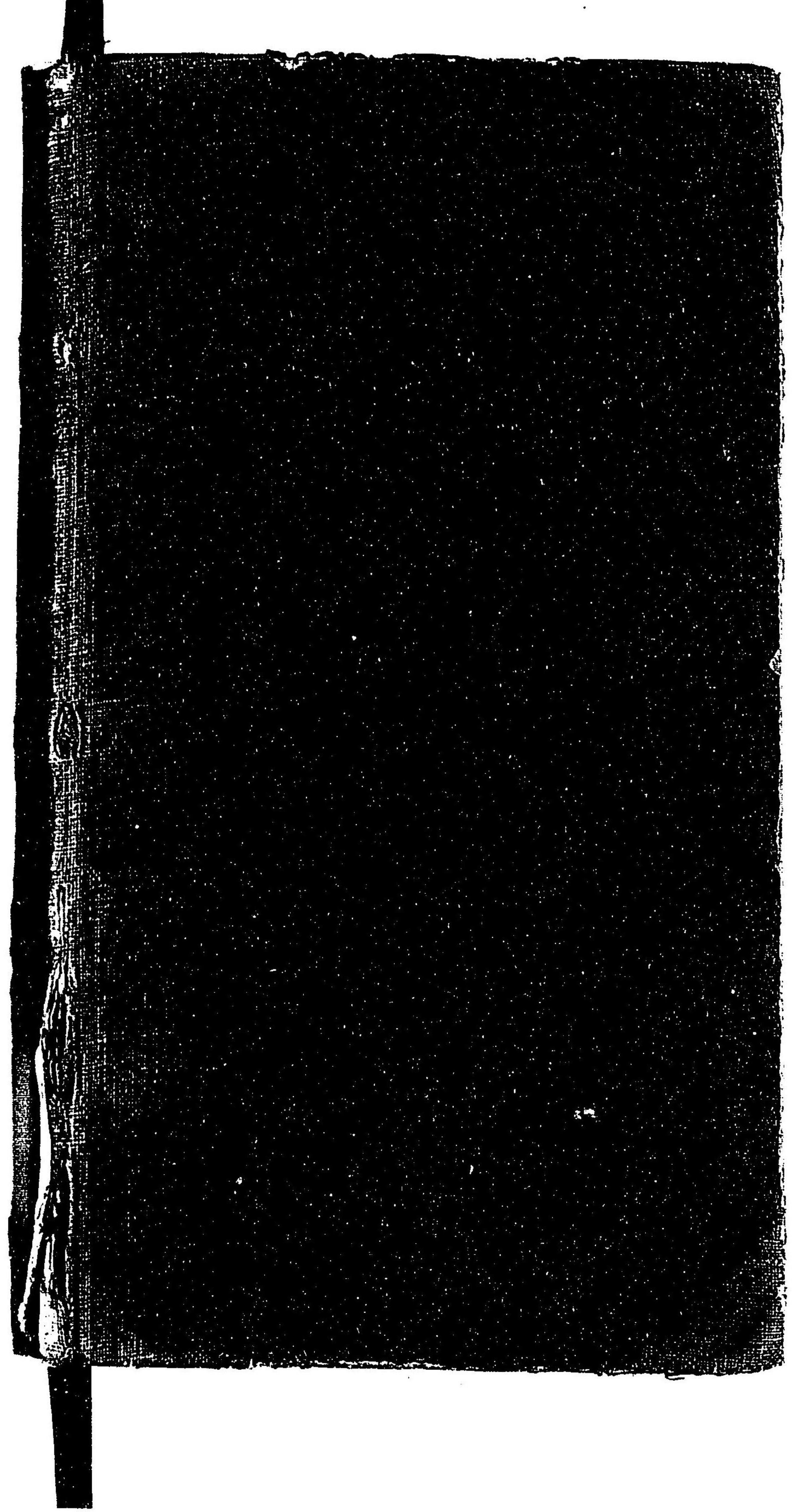
503



37

127

37





025277-000-3

31-527

上方見物

渋川 玄耳 (藪野棕十) / 著

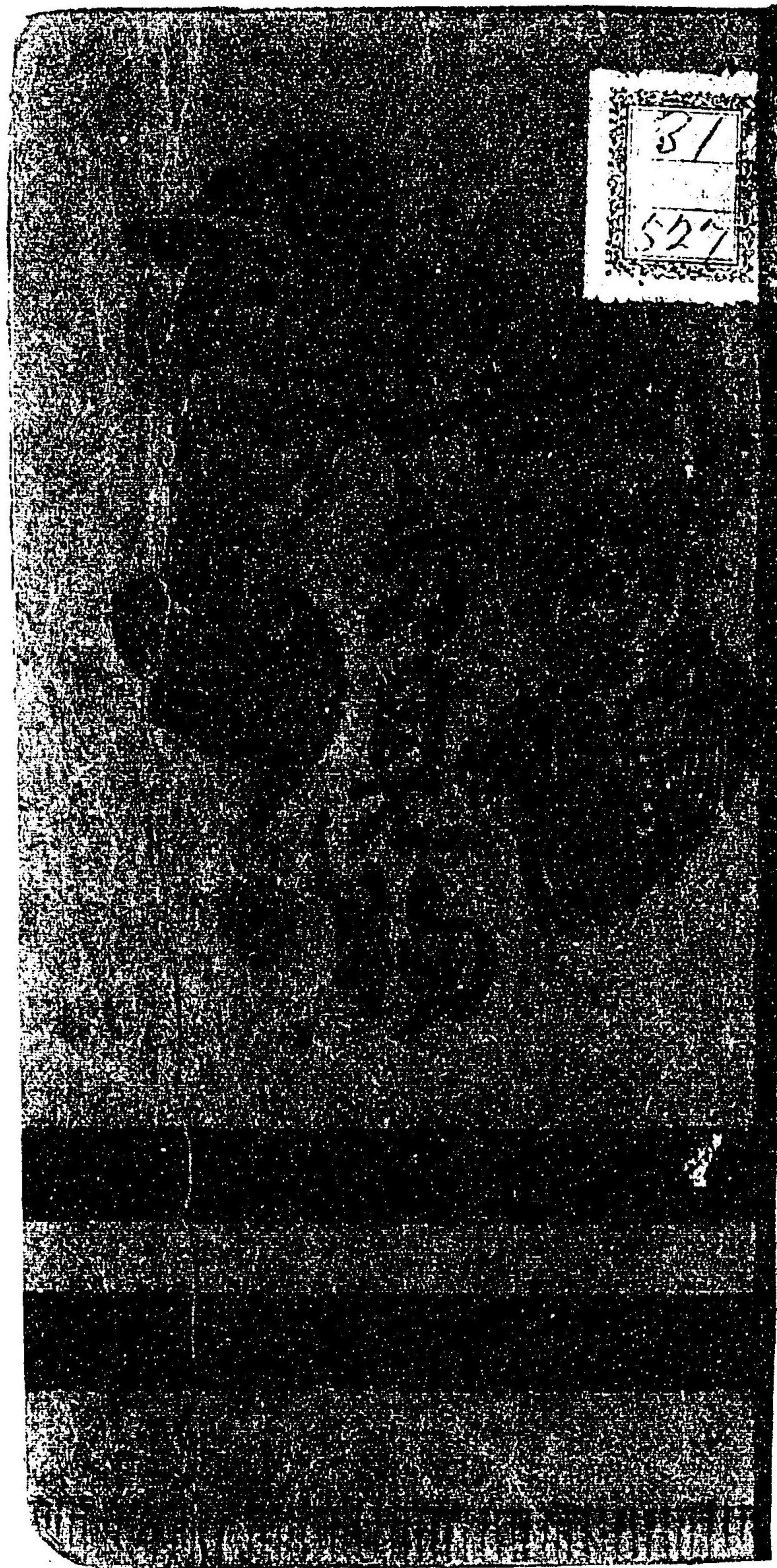
図版

M4 1

ADC-2694







31
527

